

随想

三つの

よろこび

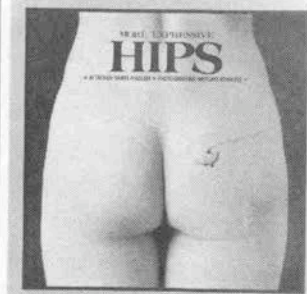
小池 義人

△須磨寺管長・須磨琴保存会会長▽



昨年は私たちの一絃須磨琴保存会にとって、記念すべき佳き年であった。特に年の後半になって、嬉しい出来事が三つも重なったからである。

一つめは、皇太子殿下から私どもの須磨琴をお買上げ頂いたことである。実は、これより先、皇太子・同妃両殿下がご来県あそばされた時に、私どもが須磨琴の御前演奏をさせて頂いたことがあり、その際、両殿下特に美智子妃殿下は格別のご関心をお示し下さって一絃琴をお手に取ってご嘉賞のお



HIPS/作—増田大成/写真—一の瀬元子

言葉も賜ったのであったが、これが機縁となって、皇太子殿下が、昨年の秋の妃殿下のお誕生祝の品として、しかも、妃殿下には内緒で、妃殿下お氣に入りの須磨琴をお選びになり、坂井知事を通じて私どもにご用命があったのである。私どもは早速、妃殿下が独習して頂けるような初歩入門用の教材も取り揃えて、「献上」を申し出たのであったが、「献上品」では誕生祝の誠意がこもらないからということ、結局、お買上げ頂いたのであった。

須磨琴千有余年の歴史の中で、皇室の中に須磨琴を御愛好になる方が出られたということは、おそらく空前のことであるにちがいないし、そのお手伝いを私どもがさせて頂いたということが第一番目の喜びだったのである。

二番目の喜びは、十一月六日、私どもの会がはじめての東京進出を果して、国立小劇場で演奏会を

開き、おかげで大成功だったことである。いずれの曲目も好評だったが、特に、笛の鬼才藤舎推峰師の作曲と賛助出演を得て発表した新作「須磨の残照」は高い評価を受け、或る有名な東洋音楽研究の権威者からも、須磨琴史上空前の傑作であり、当日の圧巻であったとの絶賛を頂いた。

二十年前には全国的にも絶滅寸前の状態にあった須磨琴の姿と思いを合せて、私たちには、わが事ながら、今昔の感切なるものがあったのである。

最後に三つ目の喜びは、東京公演の余熱のまださめやらぬ頃、須磨寺境内に須磨琴の名人真鍋豊平翁の立派な歌碑が出来上ったことであつた。豊平翁は幕末から明治中期にかけて活躍され、現行の須磨琴曲の大部分が翁の作詞又は作曲であるほどの功績を残されたので、須磨琴大成の恩人とされているのであるが、このたび、翁の子孫の好井好夫氏ら翁の郷土愛媛県の方がたのご寄附で建碑されたのであつた。碑面には翁の自作自筆の歌が写真拡大されて刻まれている一すじに心こめたる琴なれば千代のしらべも絶えじとぞ思ふこの歌碑の完成で、須磨寺には須磨琴の本拠地にふさわしく、開祖在原行平卿、中興の祖堂峰律師、大成者真鍋豊平翁の三者三様の記

念物が整ったということになるのである。私たちは今、この豊平翁の歌の心を心として、須磨琴復興の道に今後とも精進をつづけたいと誓い合っているのである。

HIPS

撮影談

一の瀬元子

△写真家△



自分で撮った、ハーフサイズのネガから、名刺判で焼かれたプリントに大変興味を持ちだしたのは小学生の頃でした。中学で、写真部に入ってから、とにかく写真ってなんて面白いんだろう……って感じ。それから20年近く、カメラは私の一部として存在しています。その存在感は、時には自分の生命の必然性、生き方の方法論をも教えてくれる良き友でもあります。写真表現は、そんな自分の生活の延長の一部で、もう一人の私（本当の自分）を見ることが出来る材料だと思えます。

一年前に、私は、不可思議なもの、見えないものとして、女性の一部であるお尻を宇宙的表现した写真展を持ちました。それがきつ

かけて、今回の写真集、HIPSの写真撮影に出会いました。

“HIPS”の企画者である増田太成氏から、30人の若い女性の真うしろからの、そのままの状態を撮ってほしい、との依頼を受け、約2カ月間、合計43人の若い女性のお尻ばかり眺め続けました。撮影しだしてから数日間は、商品としてお尻なる物体に素直にレンズを向けてましたが、だんだん慣れてくると、自分なりの価値観もでき、早く、次の被写体になるHIPを見たく、モデルさんがスタジオに入ってくるたびに「ちよつと、お尻見せて」と声をかけ、そこで、自分なりのイメージで、撮影に対する意気込みを、自然と削っていたような気がします。今回のモデルになった方々は、自分のHIPに対して、自信を持っておられたような気がいたします。それらは、女性の他の部分、バストに關しては、やはり、ふつくらと型の良い物を多く見ている、というところもありますが、このHIPに關しては、まだまだ知られていない部分ではないかと思えます。

でき上った写真集をモデルの方に見せた時、だれ一人自分のお尻を確認できなかったのも面白い事実でした。

今回のHIPSの撮影に關して意外だったことは、お尻にかぎら

ず、若い時の全身ヌードを一生に一度は写真に残しておきたい、という気持を女性が持っていることです。私も、ドレスを着ている時の美とは、また別の生の美を、彼女達に感じました。

撮影上で苦労した点は、スタジオに入るまでにできた、お尻のいろいろなしわをいかにして取るかとHairの処理でした。しわを取るには、長い間お風呂に入ってもらったのですが、撮影時期が6月中頃〜7月ですからモデルさんは大変でした。Hairの処理は、考えた結果、それほど人体に害を与えないものとして、手荒れを防ぐニベアクリームを使用し、後部のHairを全部前部までピッチリ、クリームでひつつけてもらいました。こうして、無事43人の撮影を終えることができました。裸が明るく健康的に見えるようになつてうれしく思います。

今後ともレンズを通して自分を客観視続け、より真実のものに近づきたく思っております。

神戸で

異色の出会い

神代 初美

★HIPS/大成プロ発行 1200円
〒532 大阪市淀川区西中島6-2の3-321

△淡路人形大夫△

洲本港から高速艇で一時間十分

少し歩くともう元町の商店街へ。そしてセンター街をぶらぶらと通り抜けてさんちかへ入って終る。その間、約三時間以上はかかる。私の十年來変ることのないショッピングコースである。ショッピングといってもジャストルッキング(Just looking)だが、神戸には自分が生れて育ったような安らぎを感じるのにはなげだらう。

異国的な雰囲気と海と山の織りなす景観そして歴史がひっそりと息づく町、背後に迫る山と眼下に広がる海にはさまれた坂の町、などと美しい表現で紹介してくれる女性雑誌が最近特に多い。そしてオーソドックスな服にプラスする洒落た小物などを羅列している。たしかに悪い気はしない、しかし今更なんだという気もしなくはない。私はもう随分以前から神戸が好きで、大阪の稽古場と東京の舞

台への基地として神戸市内に住み家を持っている。神戸をよく知るためになどと言訳けしては、マンションを転々としたが、今は神戸駅の近くに落ち着いている。

私は今までにソビエト、ヨーロッパ各地、アメリカ等を巡演した。ありがたいことにそのほとんどが長期巡業である。観光旅行では触れることのない土地柄や人情に接してきた。もちろん子供の頃から

日本各地はほとんど回っている。人それぞれ好き好きのあるものだが私が実際に住んでみたいと思っ

た場所として、スペインはマドリッド、アメリカはハワイとグリーンズボロそして神戸とふる里淡路島を選ぶ。今その神戸と淡路に住んでいる。関西はどちらですか」と聞かれてつい「神戸です」と答えてしまう。淡路人形の大夫が神戸ですとは実に奇妙な答えではあるが、自分自身ではごく自然なつもりである。といって決して淡路を嫌っているわけではない。美味い空気、新鮮な食べ物、しっかりとした緑が住みやすい自慢のふる里である。私にはいつもふるりの芸能、淡路人形浄瑠璃が傍にいて優しく育んでくれた。私は今、親元を離れて巣立つ子のような気持ちでいる。

文楽の人間国宝、吉田玉男さんと友人であり義太夫の弟子でもあ

る神戸の若き邦舞家花柳小三郎君の三人でリサイタルを計画している。ぜひ神戸でやりたいと随分前から決めていた私は、大阪を望む玉男さんを「多数決」「二対一」と強引に引っぱって来てしまう結果になってしまった。神戸人の気取りのなさや面倒見の良さに甘えている現在であるが、当日は精一杯の舞台を勤めて恩返しをしたいと思っている。玉男、初美、小三郎「三人の会」はなるほど異色の顔合せであり、デコボコトリオであるが何とか一つに解け合いたい。玉男さんの足を引っぱる場面だけは避けたい。私にとって淡路人形を離れての冒険は初めてだ。

ニューヨークのカーネギーホールで三日間「壺坂」を語った。芸人の憧れ、世界の桜舞台といわれるだけに場内の音響の素晴しさは例えようもない。呑気者の私もこの三日間は緊張の連続であった。おそらく今度はその時よりひどく緊張することだろうと思う。それが芸に対するおもしろいやりである。恐れおののきながら親しむこと。喜怒哀楽にしてもことん行きつくとところまで喜び、怒ると決して中途半端にはならないはずだ。

神戸の皆様「三人の会」をよろしく御支援お願いします。

★ジョイントリサイタル三人の会「競合恋振袖」2月5日(金)午後6時 神戸文化ホール 3000円



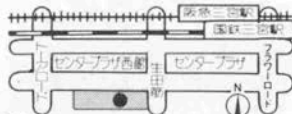
左より花柳小三郎、吉田玉男、神代初美

ファッションに
 “贅”を尽くすのは素敵。
 でも、
 いつも美しく着ている
 人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
 常に美しく——ニシジマ

- 型くずれの防止
- 素材感の回復
- カルテの作成
- お客さまのお好みに合せた仕上
- ファッショング
 ーニングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
 グレイス神戸B1 ☎(078) 332-2440

際立った魅力を醸す、ふぐの淡泊な
 味に、人肌爛のまぼろしの酒
 越乃寒梅〃とのもつれは、桃源郷を
 さまよいつつ、深い人生の感慨を
 覚える。大人の味、洗練のきわみを
 是非お楽しみ下さい。

ふぐ料理
 ★地下1階グルメシティ



神戸オリエンタルホテル

神戸市中央区京町25 ☎078-331-8111

神戸ワイン・サロン

寺本 澁

△神戸ワインサロン世話人・談路屋社長▽

ゆたかなフーケと軽いタッチ。微妙なあと味のシャトー・マルゴはポルドーの逸品。

シャトー・ラツールとともにその優美さはワインの女王。幻のワイン、ロマネ・コンチはブルゴーニュ、ほのかに気高いモーゼルの白……。

偉大なワインはどれも個性的。ただひとつ、その高貴さだけをもに、魅力はつきず、語り好き、盃をあげる。

神戸ワイン・サロンは、79年6月24日、呱呱の声をあげた。記念



一夜に8~10種のワインが試飲される

すべき発会の乾杯には、数あるシャンパンのうち、美しく、優雅な色、高貴な香り、重厚な味をもちシャンパンの発明者の名をとった「ドン・ペリニヨン」があげられた。続いて、天皇陛下が、カーター大統領をむかえて催された宮中晩さん会と同じシャトー・オーブリーオン。

以来、今日まで回を重ねること25回、伊、仏、独、米、ハンガリー、南ア連邦、日本と7カ国産、200種類600本のテイスティングに垂んとしている。

今、最大の関心事は、2年後に正式発売されるわれらが「神戸ワイン」との対面。世界の一流ワインとの出会いを通じ、神戸ワインのフーケ、色、味のイメージへの大きな期待がすでに醸造されているようだ。「私の神戸ワイン」と名付けて、その嬉しい対面を待つことにしよう。静かに、楽しみに……。

主な役員とユニークな会員をみてみると、会長長島隆(神戸地下街副社長)、世話人角田嘉宏(弁理士)、新谷琇紀(彫刻家)、村上和子(サントV

ダイレクター)、寺本澁(談路屋社長)、ワインアドバイザー今井拓雄(今井商店社長)。

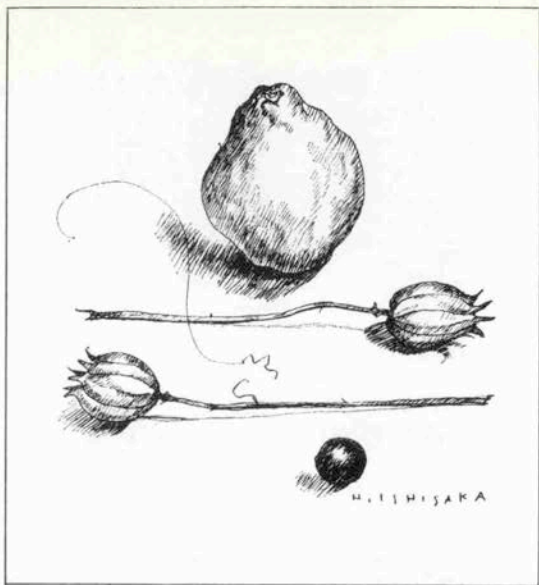
会員としては小笠原暁(泉副知事)山本敏雄(泉生活文化部長、檜崎四郎(近代美術館々長)、武術晴雄(神戸市社会福祉協議会常務理事)、小林正樹(フェリー埠頭公社理事)、中谷明(六甲勤労市民センター所長)。

芸術家では朝比奈千足(音楽家)、石阪春生(画家)、南ゆう子(詩人)、学者、文化人では奥村彪生(食文化研究家)、板東慧(生活文化研究所々長)、窪田哲夫(書編集長)、黒崎勇(甲南大学教授)、辻田忠弘(同大助教授)、松井明太(同大講師)、原英三(公認会計士)。

医者では船曳隆之、大林利治、高石務、藤田哲三、経済界では浅木幸雄(北野クラブ社長)、下村光治(風月堂社長)、島田光夫(つるや衣袋店社長)、友藤順義(友藤商事社長)、西宮章泰(大工建設社長)、則岡弘士(第一貿易社長)、福井健(スタイルビル専務)、三原孝公(三原歯研社長)、森本泰好(神戸地下街専務)。

マスコミ界からは松井高男(神戸新聞出版センター)、森中馨(神戸新聞)南豊太郎(日刊現代大阪専務)らで発足。現在40余名の会員を擁している。

□会事務局/中央区三宮町1-10-1 神戸交通センタービル神戸地下街内
電話392-4024



連載エッセイ

折々の神戸(X)

馬上の

馬頭観音

多田 智満子(詩人)

絵 / 石阪春生

市民同友会の君本さんに教えられて、青谷の馬頭観音のお寺へ行ってみた。

青谷でバスをおりると、山側に、馬頭観音霊場という石の道標が立っていて、ああそういえば、バスでここを通るときにこの道標は見たおぼえがある、とようやく思った。仏教にも寺にも人並以上の関心があるのに、今まではぼんやりと見すごして、はっきりと意識に入ってこなかったものらしい。その道標から冬枯れの山に向かって爪先上りに百メートルほど北へ行くと、もうそこが護法山妙光院、天台宗のお寺である。

寺門から石段を上りきったところ、真正面に、十分に枝葉を繁らせた楠の大樹を天然の緑の光背のように背負う形で、雄偉豪快な、型破りの観音像が聳え立っている。私は思わず息をのみ、大きな石の台座から少しうしろへすすって、その巨大な青銅像を仰ぎ見た。

仏教はまことに玄妙不可思議な宗教で、厳密には無神論であろうが、常識的にみれば一神論とも多神論ともいえる。というのは、仏教は一即多、多即一という強力な辨証法をもっていて、一つの仏がかぎりなく多様な相をとって現れることが可能だからである。そういう次第だから如来も菩薩も数かぎりなく在わし、ことに菩薩は多くの場合専門があつて、各自役割の分担が定まっている。

キリスト教やイスラム教のような一神教から見れば、こうした「神々の分業制度」は発展段階の低い宗教——いわゆる異教——のしるしと見えようが、しかし、この「分業」はそれなりに意義のあるもので、民衆は病氣とか貧困とか死別とか、それぞれの個別的な不幸の形に応じてこたえて下さる親しみやすい仏様をもつことで、どれほど救われてきたかはかり知れない。こうした手近な仏

様を通して、より高次の存在への手がかりを得る人々も多いはずである。

さてこの馬頭観音であるが、ふつう観音さまといえは、大慈悲の相をそなえた優に美しいお姿を思うけれども、この尊像は不動明王のような憤怒の相をとっている。観世音菩薩と称せられる偉大な菩薩も、たったひとりの存在ではなく、今しがたのべた一即多の理によって、多数の菩薩の集合名詞となっているようである。その中でこの馬頭観音という菩薩は、六道あるいは六趣といわれる衆生輪廻の世界のうち、とりわけ畜生道の救済を担当される菩薩で、妙光院では現代世俗風にわかりやすく、動物愛護の仏様といっておられる。たまたま、私は午年生れ、娘も午年(それも丙午)で、二人とも申しあわせたように馬と犬が大好きときている。馬頭観音とはどうやら縁が深いような気がしないでもない。

馬頭観音を祀るようになったのは、先代の住職尾市円照大和尚が、京の山科からこの地に妙光院を移して以来、鞭うたれながらこの青谷の坂道を重い荷をひいて登る馬の姿をみて、畜生道救済の仏像を造立する志を立てられたものときく。すぐ近くに有名な乗馬クラブがあるが、これも何かの縁であろう。この馬頭観音は鑄造の名匠大谷隆義師の作、昭和八年に造立されたが四十二年の山津波で破壊した。幸い、胎内におさめてあった青銅の原型が無事であったうえ、老鑄匠がなお健在であったので、翌年早速再建できた由である。

馬頭といっても馬の顔をした観音様というわけではない。頭上にひとつ、小さな馬頭が載っているにすぎず、むしろ目立たない頭飾りのような印

象である。馬といえはその小さな馬頭よりも、下の大きな奔馬像がまず目を惹く。というのはこの観音は、後脚を蹴りあげ、跳躍の姿勢をとった馬の背に片脚で突立っておられるからで、世間ひるしといえどもこれほど力動的な姿態の観音像はちょっと他に類例を見ない。仏教辞典の図版などで見ても、一般に馬頭観音はこれと同じく四面八臂の憤怒像ではあっても、蓮華座に坐っているのが普通のようなのである。

四方へ向いた四つの顔面や胸、腕、脚など、肌は朱に彩られ、六臂の手にはそれぞれ利剣、法輪、珠数等を握り、二臂は胸もとで合掌し、躍りあがる馬の背の蓮華座に、右足だけで垂直に立つ姿はじつにダイナミックで強烈な印象を与える。

昭和二十五年、神鍋山のスキーのあと、神戸に一泊された高松宮がお忍びでぶらりとこの寺へ立寄られ、住職は大いにあわてて御案内し、庫裡では奥様がどの茶器でお茶をさしあげようかと、道具を磨いている間にお帰りになったという話であった。寺の由緒書に「高松宮殿下当山へ御台臨」とあるのは、このときの散歩のことで、これを御縁に、そのあと間もなく、青銅の大香炉を寄進され、さらに、馬頭観音像再建のときの開眼法要にも臨席された由である。まことに縁はさまざま、私もいささか神妙に、この夏死んだ飼犬の冥福を祈り、今飼っている仔犬の無事成長を祈って寺を辞した。考えてみれば人間も動物の一種にすぎないが、この人間界は獣たちの単純な世界とは事変わり、修羅も畜生も餓鬼もそして天上さえも、要するに六趣のすべてを具足した騒然たる雑色の世界なのであった。

トランペット片手にブラジル一人歩き(8)
 フォーリヤ・デ・サンパウロ新聞社主催

ジヤム・セツシヨ、と ジヤズ黄金賞

右近 雅夫(在ブラジル・サンパウロ/絵も)



今でこそサンパウロにもジャズの生演奏を聞かせる店が何軒かでき、お蔭で我々のようなセミ・アマチュア・バンドでも演奏する場所に不自由しなくなったのは真にありがたいことである。僕らがブラジルで初めてデキシールのバンドを組んでやりだした一九五六年当時には、毎週定期的にプレイできる場所がなかったので、せっかくながらスタートした僕らのデキシールバンドも、結局、僅か一年足らずで解散してしまっただけ。

その頃から僕は化学の研究に没頭し出し、自宅の裏庭にあった納屋を研究室にして、前から研究していたマジック・インクの製造に成功した。早速、父と一緒に下町に小さな町工場をもうけ、最初は市内の文房具店を自分で訪問しては売って歩いたのだが、当時のブラジル人は、今と違ってなかなか新しいものには飛びつかないので大変苦労をした。

ところが偶然その工場のすぐ近くに、デキシールバンドでバンドジョーを弾いていたドウドウが住んでいたの、土曜日になって仕事を終えたとトランペットをさげて彼の家に遊びに行くのが楽

しみであった。ポルトガル系の家庭の習慣か、訪問するたびに一緒に食事をして行くようにと強いるので、僕は何時も彼の白髪の両親や姉や兄達と丸い食卓を囲んで色んな話題に花を咲かせた。ドウドウは典型的なブラジレイロなのだが、ちょっと変っていて、いわゆる「日本かぶれ」というのか、自分達ブラジル人のことをぼろくそにいつては、日本をほめるくせがあった。おもしろいことに、僕とドウドウと、彼の兄貴パウリーニョの食卓には、ナイフとフォークの代りにいつも箸が置いてあり、ヴェイニョを飲みながら、彼等は得意気に箸を使って食事をした。話が少々脱線するが、いつか日本人の結婚披露宴に彼らと招ばれて行ったことがあった。その時、バルベキューなんかには目もくれず「にぎり」や「さしみ」にばかりついているブラジル人兄弟を見て、日本人のおじいさんが「この人達けつたいな外人やなあ」といつて驚いていたのを思い出す。

さて食事を終えらると、僕らはいつものように地下室におりて行った。そこにはドウドウのバンドジョーや電気ギターのアンプ、それにパウリーニ

S. PAULO
Serviço do Brasil

ARRAJADO
SALVAMENTO
NOS ALPES

IRO DE JAZZ de 1961

Miscelanea

Amador



Francoeur



Tema



Revelacao



"Hors-
Concours"



ジャズ黄金賞の受賞者紹介記事。上段中央の
トランペット奏者が筆者。

タリー人のマエストロのシモネッテらと共に大きな写真入りで、僕はアマチュアのジャズ・プレイヤーという名目が入賞したことが報じられていた。受賞式のコンサートはレコルデ劇場で催され、ピートマンはアメリカ領事から、シモネッテにはイタリー総領事からそれぞれ賞が手渡された。やがて僕の番になると、当夜賛助出演したカナダのトリオを紹介するため、居合せたカナダ総領事が代理で賞を渡してくれたが、日本人として何かわびしい思いがした。

ヨのドラム・セットが埃をかぶった古道具と一緒に置いてあり、セルヴェージャ(ブラジル語でビールのこと)を飲みながら夜遅くまでトランペットを吹きまくった。僕ら三人はとても気が合ったので、ベースを加えてクワルテットを編成、ドウドウの発案で“The Avalons”と呼ぶことにした。そうしたある日、フォーリヤ・デ・サンパウロという新聞社がジャムセッションを企画し、僕はブッケル・ピートマンと一緒に出演することになった。“Jam Session na Folha”の第一夜、一九六〇年十二月六日の夜は猛烈な暑さで、フォーリヤ新聞社のオウデイトリオは押しかけたジャズ・ファンが通路や舞台の上の両そでにまで溢れ、むんむんする熱気で蒸しかえっていた。第一曲目の“Am I Blue”を軽快なテンポで吹き終えるや、会場はもう、もの凄い熱狂振りであった。拍手が終り切らぬ内に、ソプラノ・サクソからアルトに持ちかえたピートマンが即興のテーマを吹

くつ“I want a cheese...”と口から出まかせの歌詞を、あのニグロ独特のしゃがれ声で歌い出した。フィナーレの“Tiger Rag”を吹き終った時、僕はまるで頭から水を浴びせかけられたように汗でびしょりになり、熱狂した聴衆は立ち上って拍手を止めようとしなかった。フォーリヤ新聞社が主催したこのジャムセッションはその後も毎月一回、一年間にわたって続けられ、ブラジル全国から招かれたジャズの代表的プレイヤー達に混じって、僕等のザ・アヴァロンズは毎回のように出演、好評を得た。

そうして一年過ぎたある日、僕は突然家に新聞記者とカメラマンの訪問を受けた。フォーリヤ・ジャズ黄金賞受賞者の十二人の中の一人に選ばれたことを知らされたが、何かのまちがいがいやいかと信じられなかった。翌日のフォーリヤの朝刊の第一面には、ブッケル・ピートマンを始め、後にボサノバで有名になったジンボー・トリオやイ



マンズハーベスト
 (赤・白・ローゼ) 各 720ml・1000円
 360ml・520円
 (小売見込価格)

ひたすら品質

マンズワイン

Distributed by **KIKKOMAN**

風土の香り、四季の味。



ハクツルジョイス(特級・700ml詰)



ソフト&マイルド、食卓を楽しく
 彩るフレッシュなお酒。

白鶴酒造株式会社

男と女の距離

松澤員子

△国立民族学博物館文部教官助教▽

一昨年の春、私はバングラデシュを訪れた。首都ダッカに着いた翌日、市内のバザールに出かけて行った。驚いたことに売る人も買う人もほとんど男で、バザールは男たちでごった返していたのである。先日私は歳末の三宮街を歩いた。ここは女と子供の人波が続いていたが、それはなんら異様な風景ではなかった。私も自然にその人波の中に溶けこんで、流れに従って進んでいたのである。バングラデシュでは異様に感じたのは私だけでない。気がつくといびとの視線がジーンズにTシャツ姿の私に向けられ、「あれは男かな、女かな」といぶかっていた。私は大

急ぎでホテルに引き返した。そしてここは正統派(スニー派)イスラム教徒の社会であるということとを再確認しなければならなかった。バングラデシュの人びとは、今もイスラム教の掟で生活している。「バルダ」を堅く守って生活している。バルダによると、女は初潮を迎えると一人前の女とみなされ、男性にできるだけ近よらないように注意深く行動しなければならぬ。それは、人間は男であつても女であつても情欲をおさえることのできない不完全な存在であるから、夫婦以外の男女は、互に相手の情欲を刺激しないために距離をおいていなければならないという考え方によつてゐる。そのために、おとなになった女はバザールに買物に出かけたり、畑仕事に出たりすることはまれで、彼女は家庭で家事や育児に専念する。

私が訪れたのは極度に貧しい小作農民が大多数を占める北部の農村であつた。私の仕事は欧米の男性研究者たちとジープで村々をまわり、彼らの生活の実態を視察することであつた。どの村でも私たちはすぐさま大勢の子供たちと男たちに取り囲まれたが、女たちの姿はどこにもなかった。私は女の人とも話したいと願ひ出た。そして、教えられた通りにひとりで家の裏側にまわつた。そこにはなんと村中の女たちが集まつていて、身にまとつたサリーで顔をかくして物かげから順番に珍客を観察していたではないか。私が女であると知ると、彼女たちは顔のおおいをとつて笑顔で歓迎してくれた。村には家族の食糧を得るために、農業労働者として働かなければならない女たちもいた。彼女たちはバルダを守らない卑しい女として社会の最下位に位置づけられている。私など彼女たちの目には淫婦のように映つたのではなからうか。バングラデシュの女には娘時代がない。初潮を迎えると一挙に子供からおとなになる。村の女たちは十四・五才で結婚する。早婚なのは、性的に一人前になつた女を結婚させずにおくのは、社会にとつて危険であり、また男は女を扶養する義務があると、バルダに教えられてゐるからである。

今、バングラデシュは飢えを克服し、安定した社会を創造しようと努力している。その中で、人口の約半数を占める女性の役割は、はたしてどのように変化してゆくのだろうか。

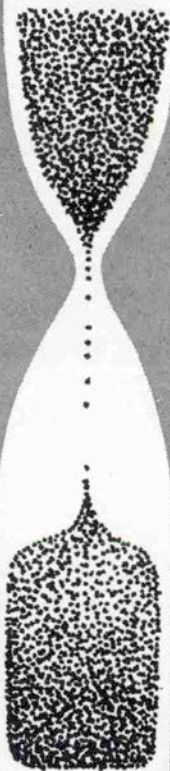


裏庭で筆者を歓迎してくれた村の女たち

★キャンペーン

国際文化都市神戸を

考える



51

行政は市民の文化活動に サービスを提供すべきだ

尾上 久雄 △京都大学教授

野口 武彦 △文学者

武田 則明 △建築家

服部 増田

正 洋 △大阪社会事業短期大学学長
△兵庫県立近代美術館館長補佐

時代とともに変わって来た文化の位置づけ

尾上 広い意味では人間が幸福に暮らす生活様式が文化だと思えますね。それに付随して例えば芸術とか、文学だとか哲学だとか、これはかなり狭い意味での文化ですが、それらを盛んにする。そして、文化産業も栄えればこれはいいわけですが、最初の大きなテーマを忘れてはいけないと、そう思いますね。

服部 戦後の三十数年の間に文化という言葉が華やかに出て来たのですが、いくつかの波がありますね。第一波は、民主主義の裏づけとして文化という言葉が使われた時代ですね。これを受けて民衆の草の根のサークル運動文化運動の時代がありますね。古いものへの抵抗としてサークル運動と結びついた時代があって、その後、いくつかの波があり、今日では行政的なものと結びついたり

産業と結びついたりしていますね。例えば故・大平総理の政策研究会の文化の時代研究グループが総理に答申を出して来た。その中で行政の文化化ということが初めて出て来た。これは鈴木内閣になっても継承され、それが今になってやっと各自治体に浸透して来ているわけですね。神戸市市民文化委員会の召集もこの動きの中にある。何故そういうものが出て来たかというと、低成長期に入って産業が新しい活路を文化に求めるということが一つあったと思う。もう一つは地方の時代の実体を何にしたらいいのかという模索の中で出て来た。兵庫県は生活文化運動ということで割と地味なものを出して来ているのですが、今度、神戸市が市民文化委員会を召集したときにも神戸市は何を出すか、周りから期待をもって見られているわけですね。神戸市にはすでにファッション都市構想があり、ポスト・ポトピアという神戸独自の

問題もありますし、兵庫県や大阪府がそれぞれの構想を打ち上げて来るなかで今、神戸的なものが問われていると思いますね。ですから各自自治体は国が下ろして来た行政の文化化という行政主導で動いていると思います。が、われわれ市民の立場からはそういうことは別にわれわれ自身の中に文化に関わる必然性のある時期に来ている



武田 則明さん

増田 洋さん

野口 武彦さん

服部 正さん

尾上 久雄さん

のではないかとということで、積極的にとり組む必要があると思います。

野口 僕は文化という言葉に照れちゃうんですよ(笑) どうもよく分らないのですよ、なぜ今さら文化なのかと結局、それがなくても最低限の衣食住は結構まかなえるところのものが文化だと漠然と考えると、その程度の文化だったら神戸はかなりのレベルです。で持っていると思うのですよ。ところが逆に、男でも女でもいいのですが、若者がとりこになって、ともかくどんなに貧乏してもそこに住みついてしまうという意味での文化だったら、僕は東京にしかないと思う。例えば赤穂や豊岡や北条などの地方都市へ講演に行くことがあるのですが、そういうところでは講演会をやっても人が入らないし、本屋にも学参と週刊誌しかない。そこで青年が欲求不満になってどうしようもなくなつてどこへ行くかというところ戸じゃない。夜行列車で東京へ行ってしまふ。神戸としてそれをどうするかという問題が一つあると思います。

増田 文化というのは非常に大きな概念だと思うのですが。逆に言うところ文化というのが上にあるとすれば、個人の領域としての生活がその下にあって、あとは社会領域の生活があり、それに関係するのが経済であり学術であり、産業だと理解しているのに、文化行政だとか生活文化だとか芸術文化だとか、文化の位置がどうしてどんどんどんどん下つて来るのか、昔からの疑問なんです。多分、昔は文化といわず教養といつていた部分もかなり文化と混同されているのじゃないですか。文化教室とかカルチャーセンターといったものは、昔は教養講座で、文化とは言わなかつたですね。

服部 戦後、文化という言葉が恐ろしく濫用されてしまつて、安っぽいものになつてしまつた。それは、アメリカ式の文化は生活様式だという考え方が拡大解釈され過ぎて、それが今、浸透して来ていると思う。だから文化というものをもう質のいいものとしてとらえ直しておかないと危ないような気がしますね。

と思います。

神戸の文化は市民が支えている

増田 文化ということを広げて考えると、人間というのはどこから来たのか、どこへ行くのかということを追っかけていることだろうと思うのです。明治が来るまではわれわれ日本人はどこへ行くかということは大体予想をつけていた。それが明治になってヨーロッパと出会ったために、どこへ行くかが分らなくなりました。いや、その前に人間がどこから来たかということもかなり分らなくなつて近代化されて来たわけですね。過去では経験しなかった一家一学の時代になって、専門家がたくさん出て来た。その前は要するに八宗兼学だったわけですよ。今、ハードウェアはつくれるようになったけれど、さて、かつて分つて分つてた人間どこへ行くのかということになると訳が分らなくなつたというところで大平総理らの考え方が出て来る。大平さんの考え方は行政のタテ割りのなかで、一家一学でなくなっている。八宗兼学をやっているわけです。建設省も厚生省や文部省もみんな文化を言い出した。こちらにソフトウェアがなかったのでヨーロッパから受けたものを処し切れないから、またもや昔に戻ろうという時代になつていっているように思えますね。そうでなかったら各省庁が喧々譁々と文化都市論やらをやる必要がないわけですよ。改めてどこへ行くのかを一生懸命に模索し始めたから上も下も揃つて文化ということを出し出したような気がしますね。

尾上 文化というものの基本には幸福で楽しく自由な生活というものがあると思う。それが造形美術とか演劇とか音楽とかいう形になる前にね。そういう意味では神戸は文化都市であるだろうし、文化人を引きつける魅力もあると思いますね。それをもっと大きく広げて行くことが大切ですね。

武田 伝統的建築物保存地域というのがあり、神戸の北野町もそれに指定されているのですが、そこにはピカッ

と光る国宝とか重要文化財はないんです。だけど全体としてレベルがいい。これがね、神戸的なんです。私はあるときに神戸二流建築論を書いたんです。一流はないんです。だけど全体のレベルは高い。それがまとまっていることによってかもし出す雰囲気なり環境なりが大切なんです。神戸にはそういう部分があるんですね。この伝建のレベルを上げることが神戸の文化論だと思うんです。どこかの土地にあるような素晴らしいものはないかも知れないけれど、全体としてレベルが高いんだという部分が神戸の文化じゃないかと思うんです。

増田 私は前に神戸の文化は読み人知らずの文化だと言つたのですが、民衆がそれぞれの生活の中で積み上げて来たものがレベルが高くて横に広がっているから支えられている町なんです。神戸は。コンベンション・シテイを支える市民が育っているんですね。これは神戸の面白いところなんです。自分がつくつたとは言わないですね。そして神戸は外へ出て活躍をする人間が育つところと同時に、そういう人たちがある時期になると帰つて来て余生を送ろうという気持ちをもつて神戸の人間の特性はマウンテン・シープ型だと思いますね。マウンテン・シープはちよつと高い所がありますとすぐその上へあがって、俺が一番高いぞと思つて他人のことをあまり気にしない。自分が充足するためにやっている。ですから思わぬ造詣の深いディレッタントがいっぱい居ますね。

尾上 今のお話にはまったく賛成なんです。子供から一人前になるまで神戸で育つて、隠居してまた帰つて来る。その間に神戸に居ないということが問題ですね。どうしたらいいんですかね。

増田 一つはハードウェアがなかったということですね。

尾上 そうですね。ハードというところクリートの建物そのものみただけで、民博のようにメカニズムのあるハードということが大切ですね。それが足りないですね。

文化は本来非体制的なものだ

増田 文化行政というところで言いたいことは、行政は人の心のなかに踏み込むようなことをしてはいけないということですね。個人のもっている経済力では満たし得ない文化衝動を可能にしてくれるメカニズムに留まるべきだと思いますね。それからまた行政がもっている幾つかのハードウェア、例えば県立近代美術館はある程度、市民に密着した独立を許すべきであって、そこへ官僚の統制を加えるべきではない。それが神戸市の場合、大切だと思えますね。もう一つ言いたいのは行政体に結びついた協力団体のようなものがこの頃できていますが、その団体の個人は自腹を切れということですね。自腹を切らなかつたらものを言えないわけですよ。だから行政の金を使って自分たちがうまくやろうという発想ではなくて自分たちが自腹を切るから行政はこっちへ来い、ということにならないといけないですね。かつては神戸市民はそうだったのですが今はちよつと曖昧になっています。尾上 大体、行政の持っている金は元は市民の金ですね。だから、むしろこういうことをしたいから金を出せと便宜を提供させることは遠慮なしに言っている。市民として主体性をもって要求することが大事だと思います。それとソフトウェア―人間を育成することが文化を育成することのポイントだと思いますね。それに行政は協力を出すべきですが、内容にまで介入すべきではない。行政は場所を提供する義務があるし、市民にはそれを要求する権利があると思いますね。

武田 行政が最初やらなければいけないのは、いわゆるスペースサービスタとしまして、体育館なり図書館なりホールなりをまずつくる。その次にプログラムサービスタです。体育館の場合ならばドミントン教室、バレー教室など要するにプログラムを用意する。本当はそういうものが出来たら今度は市民が自主運営を始めないといけない。これが市民の文化だと思うのですが、そこまでは

なかなか行っていない。プログラムを自らつくれないと本当は市民文化というところまでは発展しないですよ。野口 行政への期待、注文ははっきりしてしまっていて、金は出せ、しかし口を出さな、ですね。一都市の文化機能は、直接使用価値にならないものにどのくらい無駄な金を使うか、だと思ふんです。だから回収見込みのない予算を投下せよということじゃないですか。

これは芦屋の図書館の例ですが、本を買うのは全部読者主導型なんです。と言うよりも主婦主導型ですね。だから自分の趣味に合うものしか読まない。読書指導というのはおこがましいですが、それが広い意味のソフトウェアにつながって行くと思う。ところが限られた予算だから固い内容の本は買わなくて、要望のある趣味的、娯楽的な本しか買わないわけですね。

服部 文化は本来、反体制とまでは行かなくても非体制的なものですね。ところが行政にからめとられてしまっている。自主運営ということでは、管理面でのゴタゴタを避けるために行政が民間に自主運営をさせるということであって、基本的な企画とか理念とか行政ががっちり握っているのが普通ですね。むしろ基本的な企画や理念にこそ市民参加をさせて、運営は役所がサービスタしなければいけないところを自主運営ということでは民間にまかせからひっくり返って来るんです。

行政が文化を育成することには限界があるということを初めから知って欲しいですね。確かにハードなものはどうどんとつくって欲しいですが、つくつたら恩着せがましくしないで、今言ったように企画とか理念とかはむしろ市民サイドにまかせるということをやるべきでしょうね。

それと文化が産業と結びつくのは結果論であって、初めから産業に役立てるために文化を盛んにしようということでは、これはろくなことにならないと思いますよ。最終的にはみなさんが異口同音に言われたソフト面での問題を大事にしなければいけないということですね。

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区旗塚通 6-3-10
TEL (078) 231-3321

オールスタイル株式会社

取締役社長 川上 勉
神戸市中央区伊藤町121
TEL (078) 321-2111

カネボウベルエイシー株式会社

取締役社長 稲岡 必三
神戸市中央区三宮町1丁目9-1-807
センタープラザ東館8F
TEL (078) 392-2101

株式会社ベニヤ

取締役社長 松谷 富士男
神戸市中央区三宮町1丁目10-1
TEL (078) 332-3155

モロゾフ株式会社

取締役社長 葛野 友太郎
神戸市東灘区御影本町6丁目11番19号
TEL (078) 851-1594



キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の
企画は以上5社の提供によるものです。